

暴言に支持されて勝利した新米大統領の品格

トランプが米国の大統領になった。ショックである。何が？ 彼が大統領になったことではない。暴言が彼を大統領にしたことである。ものごとの複雑さを複雑さとして受けとめて熟慮する思考を放棄して、ものごとを単純化した暴言をわめいて大統領になることができるような社会に米国が変質してしまったことが、ショックなのである。

これまでの大統領選では、どの候補者も暴言はおろか、失言さえ命とりになることに気を配るなかで、どのように際立つ主張を行うか、に工夫をこらして、相手陣営に対する誹謗、中傷を交えながら、選挙戦に挑んできた。支持票を失うことをおそれて、暴言を慎んできただけではない。そこには、暴言によって自分自身を、政治家としての言葉を貶めることに対する歯止めのような抵抗感覚も働いていたはずである。要するに、かすかであれ、暴言による「醜さ」に自覚的であろうとする節度をわきまえ、心がけようとする慎ましやかさが寄りそっていた。

ところが、今回のトランプ候補は政治家としての自分の言葉が貧弱であることを押し隠すようにして、暴言の連発で自分を目立たせ、注目を集める戦略に出て、その戦略は見事に的中したのである。憎悪を剥きだした暴言は顔を背ける国民を多く生みだす一方で、その暴言によって煽られ、焚きつけられ、それに便乗する多くの国民を掘り起こすことにもなった。暴言はこれまでの選挙では取り残され、長いあいだ陽が射しこんでこないことに鬱屈しながら、不平を心の奥底でメタンガスのように貯めこんできた国民の中に分け入ってささやきかけ、着火させることに成功したのである。

これはヒトラーの手法でもあった。しかし、ヒトラーには人々を酔わせ、熱狂させる悪魔のごとき天才的な演説能力があったが、トランプはヒトラーのような演説の才能をまったく持ちあわせていなかったから、輦轡を買う粗野な暴言を連発して人々を振り向かせるために、自分の人格から押しだされてくる暴言を戦略とする以外になかったといえる。これまでの選挙戦で封印されてきた暴言を武器とすることは、もちろん、大きな賭けであったが、その賭けに勝利することによって、彼は暴言が本音として堂々と通用する社会に変えてしまったのである。

「腐っても鯛 A diamond in a dunghill is still a diamond.」という諺が日本にはあるが、目に見えて腐敗しつつある米国社会でありながらも、かろうじて踏みとどまっている感のあった米国社会を、彼は暴言にも恥じることのない臆面なき米国社会へと、ものの見事に “change” してみせ、わずかに残っていた米国社会への海外からの敬意を決定的に粉碎してしまったのだ。この功績は、トランプと彼を支持した国民に帰せられるべきものである。

思い起こせば、オバマこそ “change” という言葉とともに登場した黒人政治家であった。十二年前の04年夏の民主党全国大会で、「リベラルなアメリカも保守のアメリカもない。あるのはアメリカ合衆国だけだ。黒人のアメリカも白人のアメリカも、中南米系のアメリカもアジア系のアメリカもない。あるのはアメリカ合衆国だけだ」という演説を行って、分断されていく米国社会の “change” を衝撃的に掲げてみせた。

その4年後に初の黒人大統領となった彼はそのときも、「アメリカ国民が世界に送ったメッセージはこうだ。この国は単なる個人の集まりじゃない。共和党の州と民主党の州の集まりでもない。この国は今も、これからもずっとアメリカ合衆国だ」と高らかにアメリカ国民にむかって、世界中の人々にむかって呼びかけ、我々一人一人の心の中に “change” を植えつけようとしているのが強く感じられた。だからこそ、我々は彼のその言葉に鼓舞されて、暗闇の中の一灯として受けとめ、歓喜してきたのである。

そして8年後、トランプが暴言の中に “change” をこめて登場してきた。オバマの “change” は多くの困難に包囲されて、息も絶え絶えになりながらも、“change” 精神の方向性は見失われることなく、たえず見据えられてきた。しかし、トランプの暴言はオバマの “change” を一挙に吹き飛ばし、暴言の中の “change” へと方向転換させることによって、リベラルなアメリカでも保守のアメリカでもない、黒人のアメリカでも白人のアメリカでもない、中南米系のアメリカでもアジア系のアメリカ

でもない、共和党の州でも民主党の州でもない、それらの代わりに、トランプの暴言を受け入れるのか、受け入れないのか、すなわち、トランプの暴言の中に「change」を見いだそうとするのか、それとも、「dark」を見いだそうとするのか、というようにして、暴言が新たな、そして決定的な分断軸として挿入された。

トランプ支持者はなによりもオバマの「change」とはまったく対極的な「change」を望んで、トランプの暴言に期待したという見方に対しては、彼らはトランプの暴言を熱狂的に支持するかたちですでに「change」を手に入れていたし、トランプ自身も自分の暴言によってすでに選挙戦そのものを「change」させていたのである。だが彼らはいくだろう、自分たちはトランプが大統領になって、彼の暴言が政策として実行される「change」に期待しているのだ、と。

もし彼らがトランプ大統領に本当にそのことを望んでいるとすれば、トランプの「change」は選挙戦を勝ち抜くための暴言の連発どまりであったことにすぐに気づいて、失望し、やがて裏切り者呼ばわりすることになるかもしれない。なぜなら、大統領の座を勝ち取ったトランプには、選挙戦を勝ち抜くための暴言はもはや不必要であったし、一国の大統領は自分の暴言に結集した支持者たちの代表だけでなく、不支持者の代表でもあらねばならなかったからだ。

そのことだけではない。ほとんどともに政治について学習したとも思われないトランプの口から次々と吐きだされる暴言は、そのような暴言にふさわしい彼の思考を粗野にかたちづくってきているという最大の問題にも直面せざるをえない。いくら選挙戦略であろうとも、思慮深い人物なら、あのような粗雑な暴言を自分のものとして発することはありえないだろう。どう考えても、彼の暴言と彼の人格を切り離すことは容易ではない。選挙戦を勝ち抜いてきた暴言が大統領になって不用になろうとも、暴言を必要としてきた彼の思慮不足の頭は大統領にくっついたままであり、残念ながら、大統領になって突然変異するわけではけっしてないのである。

そんなお粗末な頭で、アメリカという世界の超大国の大統領を務めなければならないのだ。優秀な側近がいると思うかもしれない。だがその側近を集めるのもお粗末な頭なのであり、優秀な側近が集まるかどうかはわからないし、「類は友を呼ぶ」ことになりがちなのはいうまでもない。優秀な側近は大統領の貧弱な頭脳に耐えられなくなるし、大統領の貧弱な頭脳は優秀な側近を疎ましく思うようになるだろう。大統領になれば、トランプも慎重になって変わらざるをえなくなるから、心配しなくてもよい、といわれているが、トランプの貧弱な頭脳は大統領期間中はずっとそのままで、変わらないということを心配しなければならないのである。

ケネディ大統領はキューバ危機を乗り越えて米ソの核戦争を回避したし、逆にブッシュ前大統領はイラク戦争を決断することによって、現在の中東情勢の混沌をもたらしてきた。任期中のトランプ大統領が最高指導者として重大な決断を迫られることになったとき、賢明で適切な判断が彼の粗雑な思考からどのように導きだされてくるのか、という絶望的な想像を手に汗を握りながら、苦しく繰り返さなければならないだろう。

憎悪を剥きだした暴言で大統領にまで上りつめたトランプ劇場を見ていると、無知が栄えたためしはないし、精力的な無知ほど怖いものはないという苦さがあらためて募ってくるだけでなく、暴言で敷き詰められた大統領はそれにふさわしい報いを避けることはできないということも考えながら、多様性に根を張らなくてはならないはずの民主主義というものが、多数決主義によって息の根を止められていく無惨な光景をまざまざと見せつけられているという思いを禁じえない。

『ニューズウィーク日本版』のまだ選挙結果が明らかになっていない11月15日号の紙面トップには、「私たちの文化は、若者たちにとってあまりに卑劣で粗野になった。」という一行が最初にあり、誰のコメントかと見ると、〈ドナルド・トランプの妻メラニア——大統領夫人になった場合、ネットいじめ問題に取り組むと述べて〉というキャプションが目に入ったが、そのブラックジョークのような一行に呆れながら、大統領夫人になる前に先に亭主の暴言問題に取り組むべきだろうと、似たもの夫婦に感心する。

その左隣には、「彼の勝利が発表されれば、すぐにグリーンカードを破ろう。」という一行と、〈ナイジェリア出身のノーベル文学賞作家ウォレ・ショインカ——ドナルド・トランプが米大統領選挙に勝利すれば永住ビザを捨ててアメリカを去ると、嫌悪を表明して〉というキャプション。